

第5節 押型文、捺糸文土器の編年的位置づけ

1) 押型文土器の検討

押型文土器は東日本の捺糸文土器に対して、西日本の縄文時代早期の大半の時期を代表する土器である。押型文土器の編年作業は、中国地方では帝釈峡遺跡群の調査成果を踏まえた編年[中越利夫1991、潮見浩1999]、東海地方では若宮遺跡等の調査成果から編年案が示されている[関野哲夫1988]。近畿地方においては、岡田茂弘氏によって神宮寺→大川→尾上式(葛籠尾崎式)→福本式→高山寺式→穂谷式の型式編年が行われた[岡田茂弘1965]。その後、大川遺跡の発掘調査成果から、大川→神宮寺→葛籠尾崎1式→葛籠尾崎2式→葛籠尾崎3式→高山寺式の型式変遷が描かれるようになった[松田真一1989]。

さらに大鼻遺跡、鴻ノ木遺跡で縄文と押型文(市松文様)を特徴とする押型文土器が多く出土し、それらに大鼻式の型式名が与えられると同時に型式編年が進められた[山田猛1988]。粟津湖底遺跡クリ塚の層位的発掘調査成果から、大鼻式が押型文最古段階の土器型式であることが示されたが、この成果を踏まえながら、矢野健一氏は押型文前半期の型式変遷を大鼻式→大川式→神宮寺式と整理した。さらに、後続する葛籠尾崎1式を神宮寺式新段階と神並上層式に細分し、さらに神並上層式と黄島式併行期の間に山芦屋S4地点下層資料を位置づけた[矢野健一1993]。

NG99-41次調査地出土の押型文土器はネガティブ楕円文が含まれないため、神並上層式よりも新しく、また粗大楕円文が含まれないため、高山寺式よりも古く位置づけることができる。ここでは葛籠尾崎2式・葛籠尾崎3式(福本式)の押型文土器の各型式に見られる特徴を比較し、NG99-41次調査地出土の押型文土器の編年的位置づけを検討しておきたい。

i) NG99-41次調査地出土の押型文土器の特徴

本調査地で出土した押型文土器の特徴を述べると次の通りである。

1. 小型の山形文が主体で、複合鋸歯文などの異形押型文が見られない。
2. 長径4mm前後の小型の楕円文が見られる。
3. 口唇部外側に刻目が認められる。
4. 器壁が5mm前後と薄い。

山形文は一辺が8mmと長いものもあるが、一辺が5mm前後のものが主体である。凸線部の幅は134のようにほぼ一定のものもあるが、128・130のように、山形の頂部では幅が太く、辺部ではやや細くなるものが多い。

近畿地方の山形文は、ピッチが振幅よりも長い大川式・神宮寺式・神並上層式・穂谷式、ピッチと振幅が同じ長さの葛籠尾崎式・福本式とに分けられる。また穂谷式は口縁部内面に沈線文が施されることが多いため、大川～神並上層式と区分することができる。

小振りの山形文で、振幅と波長がほぼ同じ長さの山形文を施す押型文土器は、NG99-41次調査地以外にも、山芦屋遺跡S4地点下層[矢野1993、p.11]・北白川廃寺2遺跡SB61および包含層[網199

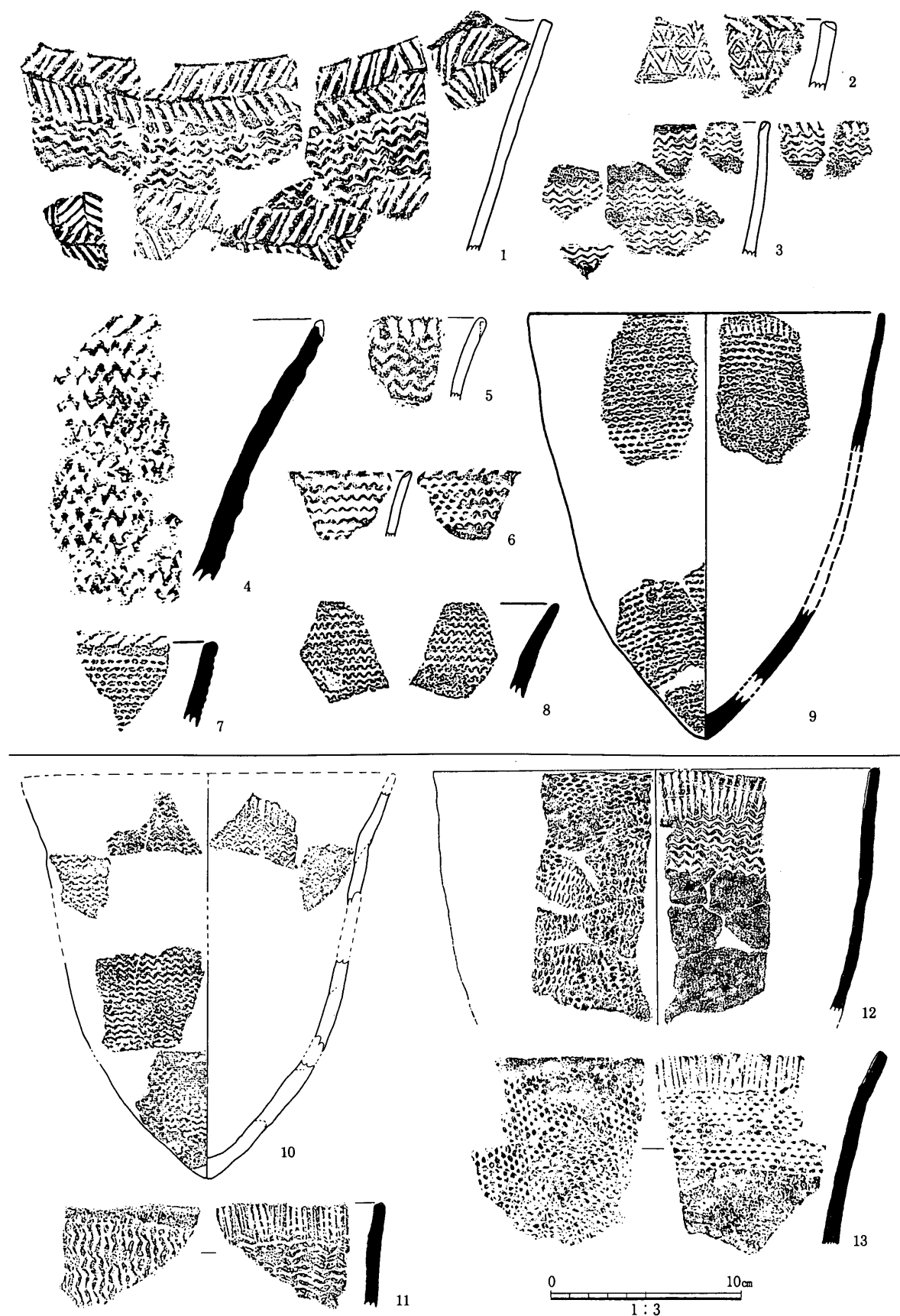


図76 各地の押型文土器

1～3・6：奈良県山添村大川(山添村教育委員会1989)、4：京都市北白川廃寺2遺跡(網伸也1994)、5：奈良県山添村北野ウチカタビロ(松田真一1997)、7～9：兵庫県神崎町福本(兵庫県史編集専門委員会1992)、10：岡山県恩原2(岡山大学文学部考古学研究室1996)、11：岡山県牛窓町黄島貝塚(広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室1981)、12：広島県神石町帝釈峡観音堂洞窟(帝釈峡遺跡群発掘調査団1976)、13：広島県神石町帝釈峡馬渡岩陰(帝釈峡遺跡群発掘調査団1976)

2]・北野ウチカタビロ遺跡[松田1997]・福本遺跡[増田重信1958、兵庫県史編集専門委員会1992]で出土している(図76)。

山芦屋遺跡S4地点下層出土資料は、小振りの山形文が主体で、綾杉文と考えられるものが少量含まれている[矢野1993、p.11]。

北白川廃寺2遺跡下層包含層では、小振りの山形文の他、綾杉文、重層菱形文、複合鋸歯文など、異形押型文が多い。この包含層の上面で検出されたSB61より出土した押型文土器は山形文が主流である。詳細な報告が公表されてから議論すべきであろうが、包含層と遺構面との関係をもとに、小振り山形文+異形押型文→小振り山形文といった変遷が考えられそうである。

福本遺跡では山形文のピッチ・振幅が、北白川廃寺2遺跡や北野ウチカタビロ遺跡のものの1/3以下という細かな山形文が主体で、これに小型ポジティブ楕円文が伴う[兵庫県史編集専門委員会1992]。

近畿地方における押型文後半期の土器の各型式の変遷は、上述の北白川廃寺2遺跡において他に層位的に検証されていない。ここでは広島県帝釈峡遺跡群での調査成果を参照し、上述した3種類の組み合わせの新古について触れておきたい。

帝釈峡弘法滝洞窟の層位別一括遺物によると、押型文土器は1：条痕地山形文(第13層下層)、2：山形文と複合鋸歯文(第13層上層・第12層下層)、3：山形文と小型楕円文(第12層中層)、4：小型の楕円文(第12層上層)、5：大型の楕円文(第11層)、6：山形文と沈線文(第10層)の組み合わせが見られることが指摘されている[中越利夫1991]。この中で、1が近畿地方の大川～神宮寺式、2～4が瀬戸内の黄島式、5、6がそれぞれ近畿地方の高山寺式、穂谷式にそれぞれ対比されている。また、帝釈峡馬渡岩陰遺跡では第3層上層の小型楕円文だけで構成される資料と、第3層下層の小型楕円文の個体と小振り山形文の個体とで構成される資料との差が明らかにされており、山形文と小型楕円文→小型の楕円文の変遷は蓋然性が高いと言える。

これらの事例を整理すると、神並上層式→[小振りの山形文+異形押型文(多)、小振りの山形文+異形押型文(少)]→[山形文(多)+小型楕円文(少)]→[山形文(少)+小型楕円文(多)]といった変遷が想定される。

この変遷の中で葛籠尾崎式2・3式は[小振りの山形文+異形押型文(多)、小振りの山形文+異形押型文(少)]の段階、福本式は[山形文(少)+小型楕円文(多)]の段階にそれぞれ位置づけられる。ここで問題にしているNG99-41次調査出土の押型文土器は、[山形文(多)+小型楕円文(少)]の段階であり、葛籠尾崎式2・3式と福本式の間に位置づけることができる。

ii) 口縁部刻目の検討

NG99-41次調査地出土の押型文土器の口縁部は直口であり、その外側に刻目が入れられる。

北白川廃寺2遺跡下層包含層出土の異形押型文が施された土器は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部外側に刻目が入れている。

山芦屋遺跡S4地点出土資料は山形文と少量の異形押型文で構成される段階のものである。4点の口縁部が示されているが[矢野1993、p.11]、いずれも直口と考えられる。刻目は口唇部先端に入れるものの他、口唇部内側に入れるものもある。また、小型山形文で構成される北白川廃寺2遺跡下層

包含層では、緩やかに外反した口唇部外側に、刻目が入れられる。

また山形文より後出する小型ポジティブ楕円押型文を持つ大川遺跡Ⅲ 4 類、北野ウチカタビロ遺跡出土の土器の口縁部は直口であり、口唇部内側には刻目が施される。

山田猛・矢野健一の行った神並上層式以前の押型文土器の諸型式の口縁部形態の変遷[山田1988]・[矢野1993]を踏まえつつ、大鼻式から高山寺式までの口縁部の特徴を整理する。

大鼻式の押型文土器は頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部は面取りされ、その部分に縄文が施される。大川・神宮寺式は大きく外反する口縁部の内側に、長さ 5～7 mm の刻目が施される。しかし神宮寺式になると、端部の文様は斜めの刻目を比較的密に施すものになり、神並上層式では口縁端部を丸めたり、細くつまみ、端部外側に刻目を施す。

葛籠尾崎 2 式段階では、口縁部は外反と直口のものがあり、口縁端部をわずかに面取りし、端面から外側にかけて刻目を施すものが多い。そして細かな楕円文の段階になると、大川遺跡Ⅲ 4 類[松田1989]、北野ウチカタビロ遺跡出土の楕円押型文を施す土器[松田1997]、布留遺跡の楕円文 1 類[矢野1981]など、口縁内面に刻目が施されるようになる。高山寺式以降は口縁部端面の刻目は消滅する。

口唇部の内側・先端・外側と刻目の位置が多様である近畿地方に対して、中国地方では口唇部の内側に刻目を施すことが一般的である。黄島式以前の押型文土器の良好な口縁部資料は無いが、押型文土器より遡る弘法滝第13層上層出土の条痕文土器では、口縁端部を面取りし、その上もしくは内側に刻目を施している(註1)。黄島式併行の段階、帝釈峽弘法滝洞穴第12層から13層上層にかけて出土した押型文土器口縁部10点全てが口唇部内側に刻目をもつ(註2)。同じく黄島式馬渡第3層出土の押型文土器口縁部も4点すべてが口唇部内側に縦方向の刻目を施す[帝釈峽遺跡群発掘調査団1976、p. 35]。さらに黄島遺跡出土の黄島式の押型文土器も、刻目をもつ口縁部の4点すべてが口唇部内側に刻目を施す[広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室1981、p55]。黄島式以降も一貫して口唇部内側に刻目が施されており、穂谷式併行の時期には刻目状に長い沈線を施すようになる[中越1991]。

このように口縁部の刻目の施文部位は、近畿地方において、端面上(大鼻～神宮寺)→口縁部外側(神並上層式・葛籠尾崎 2 式)→口縁部内側(福本式)と変化するのに対し、中国地方では最初から一貫して口縁部内側につけられていたことがわかる。小型楕円文の段階以前は中国地方と近畿地方との地域色の違いとして顕在化していた属性といえる。

上述したように、NG99-41次調査地で出土した押型文口縁部は刻目がいずれも口縁端部外側に観察された。この特徴は福本式(葛籠尾崎 3 式)に先行するものといえ、[小振りの山形文(多)+小型楕円文(少)]の組み合わせが、小型楕円文だけで構成される様相よりも古く位置づける理由の一つとして指摘しておきたい。

iii) 楕円文の生成プロセス

次に本遺跡出土の楕円文の発生プロセスについて若干触れてみたい。NG99-41次調査地出土のポジティブ小型楕円文は福本式の整った外形とは異なり、いびつな形状を呈する。

第Ⅲ章で報告したが、楕円文を施す破片(図46-143・144)について詳述する。143は磨滅しているが、長径 4 mm、短径 2 mm の楕円文を千鳥に施している様子が確認される。楕円文の上位には、凸線部

幅2mm、山形の一辺が4mmのやや小振りの山形文が認められる。さらにその上位に凸線部幅1mmで一辺8mmのやや大振りの山形文と考えられる文様が施されている。やや小振りの山形文は、凸線部が連続しておらず、頂部は確認されるものの辺部には切れた個所が認められる。

144も143と同じく、楕円文と山形の一辺が8mmのやや大振りの山形文が認められる。143にはやや大振りの山形文の下位に小振りの山形文が施されていたが、144には小振りの山形文の代わりに、菱形や「へ」字を呈する楕円文がある。そして楕円文の下に無文帯が認められる。

143・144とも楕円文には頂部が鋭角的なものが多く、菱形・「へ」字形が多く認められる点で共通する。また楕円の主軸は施文が進行する方向に対し斜交する。

一方、大川遺跡Ⅲ類4、北野ウチカタビロ遺跡をはじめ、福本遺跡出土(図76-7・9)の小型の楕円押型文は、施文が進行する方向に対し直交方向に楕円の主軸が延びており、楕円文が千鳥配置になっている。このことから、福本式の楕円文の施文原体は、棒の長軸に平行して楕円文を等間隔に彫刻し、さらに隣接する楕円文列において、先に彫り込まれた楕円文とずらして、楕円文を彫り込むものと考えられる。このような福本式の小型ポジティブ楕円文の原体では、菱形や「へ」字形、棒の長軸に斜交した楕円文はほとんど生じないと推測される。

福本式の小型ポジティブ楕円文と異なり、NG99-41次調査地出土の楕円文は、その主軸が施文の進行方向に対して斜交していること、かつ、山形文に辺部が切れているものが認められるため、山形文から派生した可能性を想定しておきたい。中部高地の細久保式から始まり、周辺地域に広がったとされてきたポジティブ小型楕円文も、多元発生的であることが示されている[矢野1993]。今後さらに他の回転押型文との関係を整理しつつ、ポジティブ楕円文の系譜を明らかにしていく必要があろう。

2) 捺糸文土器の検討

i) NG99-41次調査地出土の捺糸文土器の特徴と編年的位置づけ

本調査地から出土した捺糸文の特徴は以下のとおりである。

- 1、口縁部内外面に斜～横位に施文される。
- 2、胎土中に繊維が含まれる。
- 3、胎土中に粗粒の砂礫を混和する。

押型文土器と共伴する捺糸文土器は近畿地方において大川遺跡・布留遺跡・檜牧遺跡・後野円山古墳下層遺跡・別宮家野遺跡・神並遺跡で出土している。また中国地方では、黄島貝塚、波張崎遺跡、上福万遺跡、帝釈峽遺跡で押型文土器に伴出している。

最初に近畿地方の捺糸文土器を検討しておきたい。神並遺跡から出土した捺糸文土器は大川式、神宮式の出土する層準から出土している[東大阪市教育委員会ほか1987]。縄文の可能性もあるが、条の幅がやや広いが、条間は狭く比較的密にしまっている特徴は捺糸文と共通する(図77-1)。仮に捺糸文とすると、LR撚りの紐をやや粗に左巻きにした絡条体を用いていると考えられる。この一つ上位の第11c層から出土した押型文土器を基準にして「神並上層式」が設定されており[矢野1993]、神並上層式に先行する時期の捺糸文土器といえる。

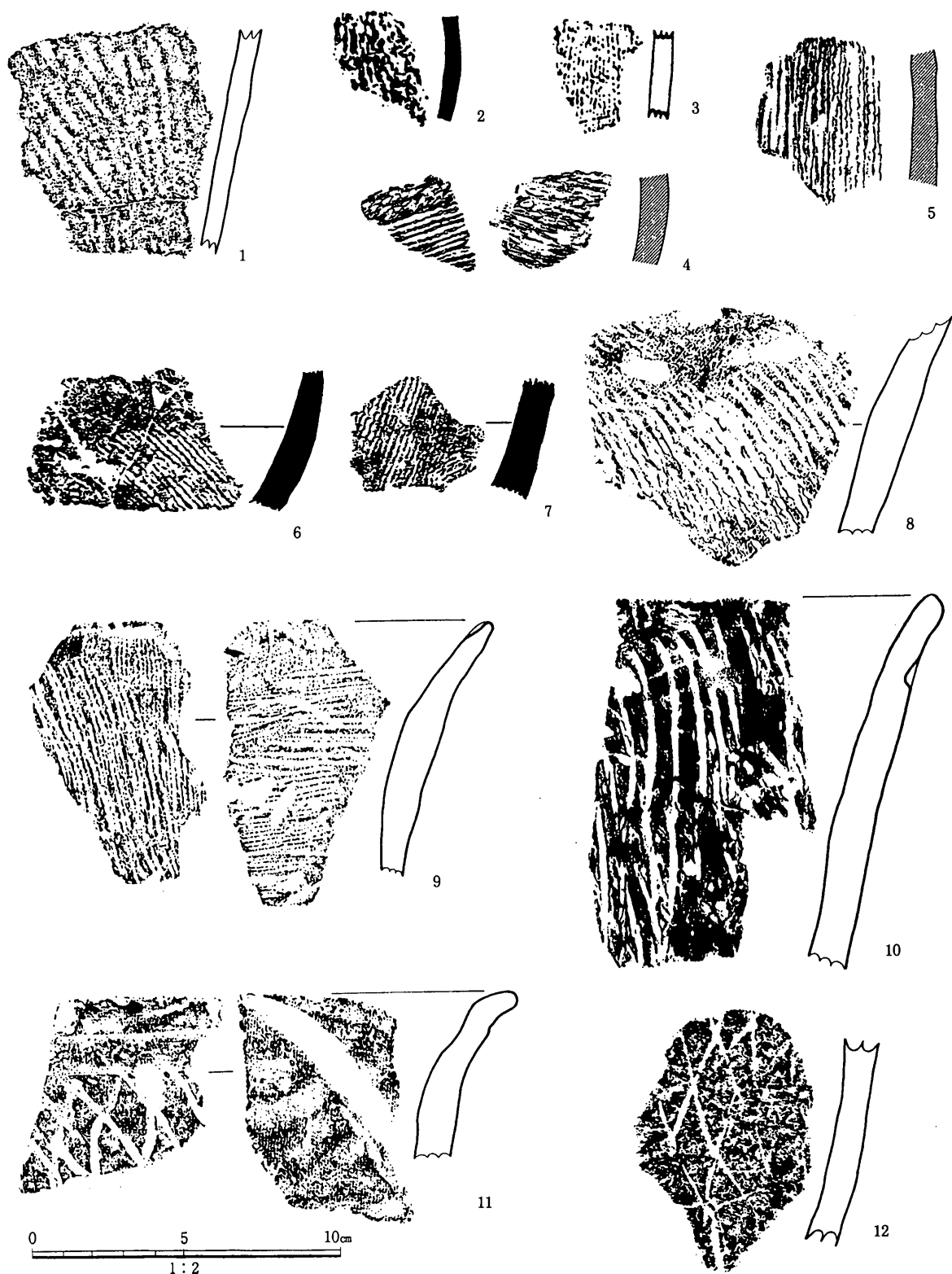


図77 各地の捻糸文土器

1：東大阪市神並(東大阪市教育委員会ほか1987)、2：広島県牛田町早稲田山(潮見浩1958)、3：岡山県神郷町野原早風A地点(平井勝1979)、4・5：岡山県牛窓町黄島貝塚(鎌木義昌1949)、6・7：兵庫県関宮町別宮家野(関宮町教育委員会1972)、8～11：米子市上福万(鳥取県教育文化財団1985)、12：天理市布留(矢野健一1981)

別宮家野遺跡では下層から神並上層式の時期の押型文土器が出土し、その上層から細密な条線の捺糸文土器が出土している[関宮町教育委員会1972]。絡条体はRL捺りの縄を密に左巻きにしたものと右巻きにしたものがある。網目文様の捺糸文は認められない。

布留遺跡ではR捺りの紐を用いた網目状捺糸文土器が1点出土している(図77-12)[矢野1981]。網目状捺糸文土器は大川遺跡[山添村教育委員会1989、85頁および図132]、檜牧遺跡などから出土しており、檜牧遺跡では高山寺式の土器に伴うと報告されている[松田1997、p.197]。

中国地方においては早稲田山遺跡[潮見浩1958]、野原早風遺跡A地点[平井勝1979]、黄島貝塚[鎌木義昌1949]、上福万遺跡[鳥取県教育文化財団1985]、帝釈峽弘法滝第11層[広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室2000]などで発見されている。早稲田山遺跡・野原早風遺跡A地点・黄島貝塚出土の捺糸文土器は、いずれも捺りが細かく、条間が密な捺糸文を施している。黄島貝塚の内外面施文のもの(図77-4)を除いて、外面施文である(図77-2・3・5)。いずれの捺糸文土器にも黄島式の押型文土器が伴う。

上福万遺跡出土の捺糸文土器は縦位に施文するもの(図77-8・9・10)、網目状に施文するもの(図77-11)が出土している。また、縦位に施文するものには条間が密なもの(図77-9)と粗なもの(図77-8・10)とがある。

また上福万遺跡出土の捺糸文土器には、縄文時代早期後葉の条痕文系土器群のように、口縁部内面に斜行沈線文や条痕調整を施すものがある(図77-9・11)。縄文時代早期の遺物として、捺糸文土器以外に押型文土器が出土している。押型文土器は大粒の楕円文であり、高山寺式に併行する。層位的に検証されていないが、捺糸文土器は高山寺式土器よりも先行するとされている[鳥取県教育文化財団1985、p.121]。また、捺糸文土器には繊維が含まれるものが多い。

その他、高山寺式に併行する時期の捺糸文土器として弘法滝第11層出土資料が挙げられる。弘法滝第11層より出土した土器は、無節の縄を用いて施文され、口縁部は外反し、捺糸文の上からナデ調整を施すと報告されている[中越1991]。

このように、縄文時代早期の神宮寺式以降、高山寺式にかけての捺糸文には2種類あることが分かる。一つは捺糸文は条線が平行するタイプ(図77-1~10)で、条線の細かいもの(2~7・9)と粗なもの(1・8・10)とがある。この捺糸文は神並遺跡12層・別宮家野遺跡・上福万遺跡・黄島貝塚・波張崎遺跡・牛田早稲田山遺跡・帝釈峽遺跡群弘法滝第11層で出土している。施文は外面に施されるものが多いが、NG99-41次調査出土の捺糸文土器のように、内外面に捺糸文を施すものも、黄島貝塚出土資料に認められる。

もう一つは網目状捺糸文土器である(図77-11・12)。上福万遺跡で高山寺式に先行する可能性が示唆されている。

高山寺式に前後する時期より、捺糸文土器の胎土に繊維が含まれるようになる。縄文時代早期後葉の条痕文系土器・茅山式土器・菱根式土器・寄倉第12層式の土器に繊維が多く含まれることが知られている。また、後野円山古墳下層遺跡[加悦町教育委員会1981]・上福万遺跡[鳥取県教育文化財団1985]などでは高山寺式の押型文土器にも胎土に繊維が含まれる。一方、黄島式の押型文土器やそれ

に伴う厚手無文の土器に、繊維が混和された事例は報告されていない。NG99-41次調査出土の押型文土器にも繊維は含まれていなかった。これらのことから、繊維を含む土器は高山寺式を前後する時期の特徴である可能性が高い。

このようにNG99-41次調査出土の撚糸文土器は、文様や施文原体から判断すると黄鳥式に併行する時期のものであるが、繊維を含むのは高山寺式によく見られる特徴である。しかし、高山寺式期の撚糸文土器のように、口縁部内面に条痕調整や斜行沈線文は認められない。これらのことから、NG

表14 近畿～中・四国地方の縄文時代早期土器型式の年代

都道府県	遺跡名	時代	土器型式	遺構	試料	測定法	測定番号	測定結果	出典
大阪府	長原遺跡	縄文早期後葉	縄文早期	SX18d02	炭	¹⁴ C	Beta-146531	7230±40B.P.	本書
大阪府	長原遺跡	縄文早期後葉	縄文早期	SX18d02	焼土	熱ルミネッセンス		6800±100B.P. 7700±1000B.P.	本書
大阪府	長原遺跡	縄文早期中葉	撚糸文	第18d層中	土器	熱ルミネッセンス		9400±800B.P.	本書
岡山県	黄鳥貝塚	縄文早期中葉	黄鳥式	貝層	貝殻	¹⁴ C	M-237	8400±350B.P.	表註1
滋賀県	石山貝塚	縄文早期前葉	石山式	黒色粘質土	土	¹⁴ C	Gak-14800	8420±140B.P.	表註2
滋賀県	粟津湖底遺跡	縄文早期前葉	大鼻～大川式	P2層クリ塚	ヒョウタン種子	¹⁴ C	NUTA-1825	9600±110B.P.	表註3
滋賀県	粟津湖底遺跡	縄文早期	大鼻～大川式	P2層クリ塚	ヒシ属の果皮	¹⁴ C	NUTA-1826	9380±110B.P.	表註3
滋賀県	粟津湖底遺跡	縄文早期前	大鼻～大川式	P2層クリ塚	クリ属の果実	¹⁴ C	NUTA-1832	9330±160B.P.	表註3
滋賀県	粟津湖底遺跡	縄文早期前	神宮寺式	L層暗灰色粘土 (粟津火山灰直下)	ヒシ属の果皮	¹⁴ C	NUTA-1834	9230±110B.P.	表註3
滋賀県	粟津湖底遺跡	縄文早期前	大鼻～大川式	P2層クリ塚	コナラ亜属の果実	¹⁴ C	NUTA-1835	9290±140B.P.	表註3
島根県	日脚遺跡	縄文早期	押型文土器		土器	火山灰層序法		AT含む	表註4
島根県	日脚遺跡	縄文早期	押型文土器		土器	火山灰層序法		AT含む	表註4
島根県	日脚遺跡	縄文早期末～前期	撚糸文・繊維土器	第5層	土器	火山灰層序法		ATとAhを含む	表註5
島根県	新植原遺跡	縄文早期	繊維土器		土器	火山灰層序法		AT含む	表註4
広島県	帝釈峽 名越岩陰遺跡	縄文前期後半	磯ノ森式	NA-3・4-9層	カワニナ	¹⁴ C	HR-329	6270±60B.P.	表註6
広島県	帝釈峽 堂面洞窟遺跡	縄文早期後葉	寄倉12層式	D-6-10層	カワニナ	¹⁴ C	HR-290	7700±80B.P.	表註6
広島県	帝釈峽 馬渡岩陰遺跡	縄文早期初頭	無文平底土器	4層	カワシシユガイ	¹⁴ C	HR-330	12080±100B.P.	表註6
三重県	大鼻遺跡	縄文早期前葉	大鼻式	SH1	土器	熱ルミネッセンス		8100±2300年前	表註7
三重県	大鼻遺跡	縄文早期前葉	大鼻式	SH1	土器	熱ルミネッセンス		9300±2900年前	表註7
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SB1竪穴埋土	炭化物(骨)	¹⁴ C	Gak-18057	10270±170B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SB1竪穴埋土	炭化材	¹⁴ C	Gak-18058	10000±170B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SB1南側炉	炭化材	¹⁴ C	Gak-18059	9390±170B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SK1土壇埋土	炭化材	¹⁴ C	Gak-18060	9970±160B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SB1竪穴埋土	炭化材	¹⁴ C	Gak-18061	9990±150B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SK201煙道付炉穴	炭化材	¹⁴ C	Gak-18784	10300±360B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SK213焼土壇	炭化材	¹⁴ C	Gak-18785	9740±320B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SK218土壇埋土	炭化材	¹⁴ C	Gak-18787	7420±190B.P.	表註8
三重県	鴻ノ木遺跡	縄文早期前葉	大川式	SK220煙道付炉穴	炭化材	¹⁴ C	Gak-18788	9870±380B.P.	表註8

表註1：広島大学文学部帝釈峽遺跡群発掘調査室1981

表註2：滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1991

表註3：滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1992

表註4：島根県教育委員会1985

表註5：匹見町教育委員会1987

表註6：広島大学文学部帝釈峽遺跡発掘調査室1995

表註7：太田正臣1994

表註8：三重県埋蔵文化財センター1998

99-41次調査出土の捺糸文土器は、黄島式から高山寺式に至るまでの過渡的な時期の資料であると推測される。

また、NG99-41次調査地出土の捺糸文土器に見られる内外面に捺糸文を施す特徴は、西日本では黄島貝塚出土の一例しか知られない。東日本では静岡県若宮遺跡、大平C遺跡で内外面に捺糸文を施すものがあるが、口縁部の施文は縦位であり、時期も大川～神宮寺式と縄文時代早期でも古い時期のものである[関野哲夫1988]。ここで内外施文の系譜について結論を見いだすことは困難であるが、東日本に広く分布する捺糸文土器群や、縄文時代草創期から早期神宮寺式段階まで残存するとされる表裏縄文との関係を考慮しつつ引き続き検討を続ける必要があろう。

3) 層位による検証と熱ルミネッセンス年代測定結果との比較

明確に地層の区別はできなかったが、SX18d03では、落込みの底面から掘り込まれたピットから押型文土器(138)が出土し、落込みの埋土から捺糸文土器(102・111)が出土したことから、押型文土器は捺糸文土器より同じ時期かやや古いと考えられる。型式比較から押型文土器が黄島式の前段階の時期、捺糸文土器が黄島～高山寺式にかけての時期とそれぞれ想定したが、これは出土状況からも矛盾しない。

熱ルミネッセンス年代測定については前述したが、押型文の年代が出ず、捺糸文土器は $9,400 \pm 80$ B.P.という値が示された。

近畿～中四国地方で行われた土器の年代測定結果を参照すると、大鼻式が $10,000 \sim 9,000$ B.P.、大川式～神宮寺式が $9,000 \sim 8,000$ B.P.、黄島式が $8,000 \sim 7,000$ B.P.がおおよその年代といえる(表14)。高山寺・穂谷式の年代測定は行われていないが、押型文に後続する早期末の寄倉12層式では $7,700 \pm 80$ B.P.となっている。

大まかに見て、今回の測定結果は、捺糸文土器が高山寺式の年代よりも黄島式の年代に近いことを示している。しかし、黄島式が $8,000 \sim 7,000$ B.P.であるため、 $9,400 \pm 800$ B.P.の年代値はかなり古いといえる。これは発掘現場においてバックグラウンドの測定ができず、土柱をもとに年間線量の測定をおこなったことから生じた誤差であると考えられる。より精度の高い測定を行うために、資料提供者は現地での年間線量の測定、十分な量の試料提供といった点について配慮すべきであろう。

註)

(1) [広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室1981]第22図118・120・121・128を指す。

(2) 帝釈峡弘法滝洞窟第2～9次調査12・13層出土資料[広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室1981、第20図]にもとづく。その他にも同第10次調査で12・13層相当層から押型文土器口縁6点が出土している。そのうち刻目をもつもの4点すべてが内面に施していることが図示されている[広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室1995]。口縁外面に刻目を施す押型文土器は第10次調査で山形文のものが出土しているが、この1点を挙げるのみである[広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室1995、第9図4]。